

Newsletter

2020.9.14

立教大学全学共通
カリキュラム運営センター

全カリ・オンライン授業への道

新型コロナウイルス（COVID-19）の蔓延を受けて、2020年度春学期、立教大学では全ての科目をオンラインで実施した。全カリでは春学期に言語系でおよそ1,350コマ、総合系でおよそ360コマを開講したが、準備期間が僅かしかなかったにも関わらず、関係する全ての教職員の協力により、オンライン授業実施が可能となった。ご多分に漏れず「山あり谷あり」の道のりであったわけだが、本特集では大きく2つの視点から、春学期のオンライン授業実施を振り返ることとしたい。具体的には、まず、全体を俯瞰する全カリ部長の視点（言わば「鳥の目」）で、オンライン全面実施に至った経緯や全カリとしての課題を概観する。続いて、全カリ内部にフォーカスを絞った事務室の視点（言わば「虫の目」）で、総合系と言語系それぞれにおける実際の準備・実行フェーズの舞台裏に迫る。

●全カリ部長の視点から（全学共通カリキュラム運営センター部長 井川 充雄）

2020年1月下旬、中国・武漢が封鎖された時、否、2月初めに横浜港に停泊するクルーズ船内での集団感染が発生した時でさえ、今回の感染は、SARS（2002～2003年）やMERS（2012年）と同じく、局地的な現象で、かつ短期間で収束するだろうと楽観視していた。ただ、2019年度卒業式・学位授与式の中止が決定された2月末になると、ただごとではないという緊張感が満ちてきた。それでも、3月12日の部長会で入学式の中止と春学期授業開始日を4月30日とすることを決めた際も、4月30日はあくまで「キャンパスでの対面授業の開始日」であり、ここまでは感染症が収束し、対面授業を開始できるだろうという判断であった。ただ翌週になると、「対面授業が実施できない場合、全ての科目について、原則、オンラインの授業を実施する」ことが決まり、一気にオンライン授業へと舵を切らざるを得ない状況となった。

3月以降、全カリ内でも頻繁に臨時の会議や打合せを行ったが、最大の難関は言語系の授業をどのように行うかということだった。言語系チームミーティング等では、言語の科目は対面授業でないと不可能だとの強い意見が出され、授業回数が少なくなったこともあり、教育の質をいかにして保証するかについて議論が重ねられた。

4月に入ると、オンライン授業の全面実施は不可避となり、4月30日までの期間はオンライン授業を準備するためのものと位置づけられるようになった。言語系では、最終的に英語プレイスメントテストもオンラインで実施することとなり、各言語研究室でオンライン授業の準備を行った。総合系でもオンライン講習会の開催やナレッジ共有掲示板の設定等、慌ただしく準備を行った。また、全カリとして、しょうがいのある学生にも安心して受講してもらえるよう腐心したつもりである。兼任講師の比率の高い全カリにあって、全ての科目をオンラインで実施するには大変な苦勞があった（春学期の授業をご担当いただいた兼任講師数は約380名に上る）。他方、今後のオンライン授業の活用の可能性についても検討を開始している。

いずれにせよ、大きなトラブルもなくオンライン授業が実施できたことについて、全ての科目担当者の皆さん、そして全カリ事務室や教務事務センター全カリ担当の皆さんのご尽力に、あらためて感謝を申し上げたい。

●全カリ事務室の視点から（教務部全学共通カリキュラム事務室 宇野 裕樹／郡司 晃岳）

【総合系】

3月から5月までの未曾有の混乱がはるか昔のことに感じる。学生時代に身に付けた気合と根性、そして体力がこんなところで生かされるとは思ってもいなかったが、まずは春学期を無事完走でき、皆さま方にお礼申し上げたい。8888、8888、8888（拍手）

さて、下記に記すのは、自らへの自省と自戒も込めて、春学期の授業準備の舞台裏をまとめたものである。

■オンライン授業の内幕

科目担当者: オンライン授業ってどうやるの？

事務局: 「Zoom」か「Google Meet（以下 Meet）」を使ってください。

科目担当者: 「Zoom」「Meet」って何？

事務局: 事務局もまだ使ったことがありません。。

科目担当者: 立教時間とBlackboardは何が違うの？
TA/SAの採用は可能か？
著作権の扱いはどうなるのか？
ノートPCなどの貸し出しはあるのか？

事務局: 確認します... 学内で検討中です...

何を隠そう、事務局もそんなレベルからのスタートであった。上記やり取りにあるように、オンライン授業を運営するうえで欠かせない各種ツールの情報や知識、TA/SAをはじめとしたオンライン授業を開講するうえでの支援制度、著作権の指針など、いくつもの不確定な要素を抱えながら、忍び寄る4月30日の春学期授業開始に向けて、手探り、綱渡りの状態で、準備を進めていったのであった。

授業開始に向けて事務局として大きく以下2点に留意して取り組んだ。

一つは、ぶっつけ本番となるオンライン授業を無事開講に漕ぎつかせること。学生に対し、平時のときと同様に科目提供ができるよう、不開講科目が多発することがないように心掛けた。本誌後半の「授業探訪」で紹介している「スポーツスタディ e」はまさにその一つの象徴と言えるであろう。一方で開講するために大幅なシラバス変更を認めれば、シラバスを確認して履修登録している学生にとって不利益を与えることになり

かねない。そのため、所定のシラバスの範囲内で実施してもらえるよう教員へ依頼を行った。相矛盾するこの両者の微妙なバランスを保ちながら、直面する各種課題に対しての方策を検討しては、支援策などを講じる日々であった。その他、春学期は、先生方からの声から以下のようなFD関連行事が企画・実施された。

< FD 関連行事 >

実施項目	実施時期	実施内容の詳細・補足説明
第1回オンライン授業講習会	4/22	接続体験 (Meet)、全カリの方針、デモ授業 (オンライン講義形式 (一方向))
第2回オンライン授業講習会	4/23	接続体験 (Zoom)、全カリの方針、デモ授業 (オンライン演習形式 (双方向))
ナレッジ共有掲示板の開設	4/24	Blackboard の掲示板を使った情報共有
問い合わせ窓口の開設	4/27 ~ 6/14	臨時に Meet を使った問い合わせ窓口を開設
授業 URL の周知	4/30 ~ 5/6	初回授業の URL を Web へアップ
授業巡回	4/30 ~ 5/13	第1週、2週の授業を巡回し、オンライン授業の配信状況の確認を実施
教員向けオンライン授業に関するアンケート	5/6	オンライン授業の開始から1週間経過時における授業実施上の問題や課題の把握
第3回オンライン授業講習会	7/7	成績評価方法に関する案内、課題・テスト機能等に関する紹介
科目担当者連絡会	7/29	秋学期のオンライン授業に向けて春学期のフィードバック、オンライン授業の実施方法、実践例の紹介 (Meet、オンデマンド、Zoom)

もう一つ事務局として重視したのは、迅速にかつタイムリーな情報伝達である。しかし、新型コロナウイルスの局面と足並みをそろえるように、授業に関する情報や方針も刻一刻と変化。4月3日にすべての授業がオンラインで行うことが決定されて以降、授業開始の4月30日までの間に、教務事項やTA/SAなどの授業支援制度、ZoomやノートPCの貸し出しなど各種ツールに関する案内など、メールがその都度発信されることとなった。その影響で、必要なメールが大量のメールに埋没してしまうことになってしまったと反省している。ちなみに総合系のアドレスにおける4月から5月末までのメールのやり取りは、受信1,600件、送信600件までに上った (4月~7月末現在では、約2,500件の受信メール、約1,000件の送信メール)。

■最後に

先生からの声

各大学の大量の連絡メールと学生への連絡に忙殺され、授業準備の時間が削られてしまった。

大量の文字列をメールで送り付けることは、送信者の安心の担保でしかない。

担当者が授業運営について、自由に、気楽に意見交換できる場を作ってほしい。

怒涛の春学期を終えてほっとしたのもつかの間、来る秋学期のオンライン授業を控え、「情報発信のあり方」に加え、オンライン授業で培ったナレッジやノウハウの蓄積・共有・活用としての場、そして兼任講師がコミュニケーションを図る場として、かつて『大学教育研究フォーラム』で言及された「全カリのたまり場（サロン化）」の必要性を痛感している。

春学期は、オンライン授業の実施方法等すべてにおいて十分な引き出しやノウハウがなく、学生にとっても教員にとっても平時の授業の姿を追い続ける苦しい日々になってしまったのではないかと感じている。事務局として至らない点が多く、ご迷惑をおかけしたと思うが、先生方、そして関係部局のご協力を改めて感謝するとともに、今後もより良いカリキュラム実現のために、引き続き皆さまのご指導ご鞭撻をお願いしたい。

【言語系】

波乱万丈の総合系からバトンを受け取り、ここからは言語系の怒涛の春学期を振り返っていきたい。

言わずもがな、言語系に関しても、「Zoom、Meetって何？どう使うの？」「Blackboardと立教時間って何が違うの？」という状態からオンライン授業の準備は始まった。オンライン全面実施の決定以降も、状況は刻一刻と目まぐるしく動き、様々な方針や情報が滝のごとく流れてきた。立教内で飛び交い日々更新される情報だけでも相当な量であったと思うが、他大学でも教鞭を取られる先生方にしてみれば、そちらからも情報の波が押し寄せてくるわけである。見落としや取り間違いといった「情報の消化不良」は避けられない状況にあって、先生方の負担を少しでも軽減するために、全カリとして大事な情報を一度集約し一元化しよう、ということになった。これにより作成されたのが、「全カリ言語のオンライン授業に関するガイドライン」（4月30日全カリ委員会資料）である。同ガイドラインには、全カリ言語の授業運営方針、学生に伝達していただきたい内容、そしてオンライン授業に関する有用な情報サイト等が盛り込まれ、A4用紙で5ページにまとめられた。

しかし、先生方一人ひとりのPCスキルもITリテラシーも千差万別である以上、A4で5枚のガイドラインを読んでいただくだけで、1,000コマを超える授業の全面オンライン化が万事うまく運ぶほど甘くはない。「読んで分かる」と「実際にできる」の間には当然隔たりがあり、この隔たりを埋めるための支援、一人ひとりの疑問や不安を解消するための丁寧なコミュニケーションは必要不可欠となる。全カリという大きな組織にあって、その構成員が同じ方向を向いて前進するために、「密なコミュニケーション」は最重要ファクターと言っても過言ではないだろう。このコミュニケーションにおいて、組織内の重要な「ハブ」として、時には「潤滑油」として、その役割を担ったのが各言語教育研究室であった。次頁の表はその取り組みの一部をまとめたものである。

表に示す通り、限られた時間の中でもきめ細かい支援に奔走されていた。大きく分けると、①オンライン授業の実用的スキル向上を狙った各種ツールの活用支援、②「教育の質の保証」と「教材開発の効率化」に寄与する共通教材の作成、③個別の問合せや不安を受け止める場としての相談窓口の設置、という3つに分類できると思うが、この他にも、各言語教育研究室における担当者連絡会やシンポジウムを通じて、各教員に蓄積した様々なノウハウの共有知化が図られたことも申し添えておきたい。

これらの準備を経てもなお、ミスや間違いは「起こり得るもの」として想定された。その前提のもと、4月30日の授業開始直前のタイミングで、教務事務センターの全カリ担当者が中心となり、初回授業のURLや受講に際しての注意事項がBlackboard／立教時間を通じて適切に周知されているか、最終確認作業が行われた。全言語科目のBlackboard／立教時間に入ってチェックし、不備があれば担当教員に連絡を取って修正してもらおうという膨大な作業である。授業開始直前の特に慌ただしい時期に、他の業務にも追われながら意識は朦朧（ワーキングハイ？）であったと思われるが、気合と根性で完遂されたことに頭が下がるばかりである。

最後に、全カリ言語で取りまとめた「欠席学生リスト」について触れたい。これは6月頭時点で全カリ言

語の授業に出席していない或いは欠席が続く学生を一覧化したものである。新型コロナウイルスと全面オンライン授業という有事にあって、大学での授業自体未経験である新生を筆頭に、学生は大きな困難に直面していた。そのような中、何らかの事情で授業に参加できていない学生を抽出し、各学部でのフォローに役立てていただくことを企図した。各教員と教務事務センターの迅速な対応によって短期間で一覧化できたが、「全学共通」という全カリならではの組織横断的な網羅性が活かされた一例ではないだろうか。

ふとこれまでの全カリの会議体（全カリ委員会、コア会議、総合系チームミーティング、言語系チームミーティング）を振り返ったところ、4～5月だけで約30時間が注がれていた（前年同期は12時間）。会議資料の作成や事前のすり合わせ、事後の議事録作成の時間まで含めれば、会議時間の倍では済まないのではないかと思う（ちなみに、議事録だけでも約14万文字、A4用紙で130枚に上る）。通常時の2倍速以上のスピードで、まさに「駆け抜けた春学期」であったと思いを馳せた。今回のオンライン授業を通じ、全カリの幅広さと多様性を改めて認識したと同時に、何よりもそれらが「全学的な支え」によって成り立っていることを痛感した次第である。未曾有の難しい局面にありながら、全カリを支えて下さった全ての皆さまにこの場をお借りして心から感謝申し上げるとともに、本特集で振り返った様々な取り組みが今後の全カリひいては全学にとって、有意義なものになることを願ってやまない。

<各言語教育研究室の取り組み>

各教育研究室	実施内容	補足説明
英語	Meet 活用支援	メディアセンターが制作した Meet の利活用に関するマニュアルを英訳
	Zoom 活用支援	ディスカッションコミティを中心に、Zoom の授業マニュアル・動画を制作
	専門チームの組成	デジタルコミュニケーションコミティを立ち上げ、機器やソフトウェアの質問に対応 Blackboard に関する英語ホームページを制作し、21 のショートムービーを公開
ドイツ語	オンライン講習会	Zoom による接続体験やデモ授業等のオンライン講習会を計 4 回実施
	共通教材の作成	共通教材（音声の埋め込みやアニメーション機能を活用）を作成し各教員に配布 授業内で実施する期末最終試験についても、研究室が中心となって作成
	相談会・情報交換会	オンライン授業に関する教員向け相談会および情報交換会を計 5 回実施
フランス語	オンライン講習会	Zoom・Meet による接続体験やデモ授業等のオンライン講習会を計 3 回実施
	ヘルプデスク	教員への個別対応を目的としたヘルプデスク（計 16 日間、各日 1 時間）を設置
	共通教材の作成	共通のオンライン教材を作成し各教員へ配布。また、成績評価の一助となるよう 統一テストに代わる「力試しテスト」を作成
スペイン語	オンライン講習会	Zoom・Meet による接続体験やデモ授業等のオンライン講習会を計 4 回実施
	全体のフォロー	必修クラスの全 1 年生を対象に相談窓口（計 6 日間、各日 1 時間）を開設 授業内でフォローしきれない部分等について、専任教員が後方支援
	共通教材の作成	オンデマンド授業用の動画（共通教材）や課題を作成し、各教員に配布
中国語	オンライン講習会	Zoom による接続体験やデモ授業等のオンライン講習会を計 2 回実施
	マニュアルの作成	Blackboard 上で音声データ等を提出する際のマニュアルを独自に作成 課題の表示開始や採点基準等のマニュアルも作成し、各教員に配布
	共通教材の作成	共通の補助教材、小テスト、課題等を作成し、各教員に配布
朝鮮語	オンライン講習会	Zoom による接続体験やデモ授業等のオンライン講習会を計 4 回実施
	情報交換会	オンライン授業に関する教員間での情報交換会を開催
	共通教材の作成	共通の授業動画や各種資料を作成し、Google Drive にデータベースを構築 原則、授業の 2 日前に、各回の授業通知案および資料等を各教員に送付

授業探訪

2020年度 言語系科目・言語必修科目「中国語基礎1」

担当：森平 崇文（中国語教育研究室主任／外国語教育研究センター教授）

「中国語基礎1」ではこれまで統一の教科書を採用し、学期末に統一テストを実施してきた。科目担当者を自ら選ぶことのできぬ履修者に、できる限り均質な授業内容を提供し、より公平な成績評価を与えるためである。初めてのオンライン授業、しかもリアルタイムで実施する場合、一番の懸念はより均質な授業内容と公平な成績評価を1,500人以上の履修者と全50クラスで維持するには如何なる方法が適切か、ということであった。

検討の結果、中国語教育研究室では最大300人まで受講できるZoomの特性を活かし、50クラスごとに各科目担当者がオンライン授業をするのではなく、専任1人と教育講師5人が曜日と6の授業グループごとに分担し（月曜3・4限、火曜1・2限、火曜3・4限、水曜1・2限、木曜1・2限、金曜3・4限）一方向によるリアルタイムのオンライン授業と決めた。一方向にしたのは学生への個別対応とやりとりの必要がないため、履修者数の多寡に関係なく授業を行うことができるからである。授業時間は70分までとし、残りの時間は質問や意見交換、毎回出される課題に取り組む時間とした。

今年度から採用した統一の教科書には著者によって各課のパワーポイント教材が作成されており、著者及び出版社の同意を得て、立教のオンライン授業でもパワーポイント教材の利用が可能となった。この教科書付属の教材を基礎に専任教員と教育講師の6人が授業を行うことで、より均質な授業の提供を目指すことにした。履修者が300人を超える済理と社営の授業グループは2クラスに分けて2人の教員が分担し、また授業担当者の急病やPCトラブルで急遽授業が不能となった場合の措置として、授業担当者以外の教育講師でその時間に授業のないものが交代で待機し、不測の事態が発生すれば代講できる体制を整えた。さらにZoom等のトラブルが発生し、オンライン授業がリアルタイムで実施できない事態を想定し、一部の授業を録画しておき、後日録画したものを視聴させるといった措置をとった。

統一テストに替わる成績評価方法であるが、12週24回の授業で毎回課題をBlackboardに提出し、その点数の総計によって成績評価をすることにした。各週第1回は教科書の本文から指定された2文を発音し録音するもの。各週第2回は授業で習った文法事項に関する選択問題と作文問題を手書きで提出する筆記問題である。筆記課題を手書きにしたのはPCやプリンターがなくてもスマホ等で提出が可能であることと、手書きにすることで不正行為をできる限り防ぐためである。課題のBlackboardへの提出方法については、PC版とスマホ版、それぞれのマニュアルを研究室で作成し、第1週に関しては課題の配点を下げ、提出期間を通常より長くすることで課題の作成と提出に慣れる準備期間とした。

オンライン授業を担当されない兼任講師の先生方には担当されるクラスの履修者に対し、毎週2回提出する課題の採点、コメントをお願いした。またオンライン授業は一方向のため、授業内でのチャット等による履修者からの質問には答えず、代わりに授業内容に関する質問は全て各科目担当者が対応することにした。

オンライン授業による不足を補うため、中国語教育研究室では複数の補助教材や自習教材を作成してBlackboard上にアップし、授業外学習の一助とした。発音に関しては20分程度のオンデマンド教材を5回分作成した。これは授業週が本来の14週から12週に短縮されるため、その分授業内で発音に割く時間が減少するための措置である。更に教科書に出てくる単語をまとめた単語帳、文法補助教材、自習教材として穴埋め・並び替え問題をアップした。これらはすべて教育講師が中心となって作成した。

今学期オンライン授業を振り返り不十分であった点として、授業担当者と課題を提出する科目担当者が異なることへの周知が履修者に徹底できなかった点、教科書が5月末の段階でも一部履修者に届かなかった点が挙げられる。

授業探訪

2020年度 総合系科目・スポーツ実習科目「スポーツスタディ e」

担当：石渡 貴之（総合チームメンバー／コミュニティ福祉学部教授）

全カリ総合系科目では、スポーツ実習が春学期・秋学期合わせて150コマ（定員20～40名）設定されており、1年次春学期から履修できる仕組みとなっている。スポーツ実習は健康維持・増進を目的として、実践と講義を通して科学的知識、技能、またスポーツに纏わる文化的背景を学ぶ科目群となっている。また、スポーツ実習は実技を中心とした「スポーツプログラム（1単位）」と理論の講義をしっかりと取り入れた「スポーツスタディ（2単位）」により構成されており、心身に関してバランスの取れた知性と判断力を養うことを目的としている。2020年度春学期も例年通り、バラエティ溢れる種目のスポーツ実習を始める予定であった。

しかしながら、その予定は未曾有の事態（COVID-19）により、変更せざるを得ない状況へと変わった。4月下旬に春学期全ての授業がオンラインでの実施に決定されたが、講義科目と違い、スポーツ実習は身体を動かすのが主体という特性上、限られた時間の中で相当な工夫が求められた。各教員がそれぞれのスポーツ種目をオンラインで行うという選択肢もあったが、緊急事態の状況下で学生が室内、そしてパソコンやスマートフォンなどの前で行うことを考えると、物理的に実施が困難であることは明らかであった。そこで、考案されたのが「スポーツスタディ e（2単位）」の新設であった。

「スポーツスタディ e」のコンセプトは、専任教員と兼任講師が協力して一つのコンテンツを作り上げることとし、体調管理や健康の維持・増進を基本に、シェイプアップやパフォーマンスの向上を目的としたトレーニング方法の習得、そして適切な生活習慣を身につけることを目指した。具体的な授業内容はシラバスを参考にして頂きたいが、総勢37名の教員がそれぞれの専門分野の知識を活かした講義や室内で行えるトレーニング映像（15分程度）を分担して作成した。

また、「スポーツスタディ e」はオンデマンド授業（78コマ、履修定員2,340名）とし、動画はGoogle Driveを用いて管理した。授業の流れは、学生が最初に各回の講義または実技映像を視聴し、その後、各自課題または実技を行い、最後にリアクションペーパーを提出することとした。オンデマンド授業にしたことにより、学生は好きな時間に映像が見られることや繰り返し映像を見て実技を行えるメリットがある。そして、実技においてはヨガやボディコンディショニングに加え、様々なスポーツ種目で行われているトレーニング等を視聴し、実際に実践し、体調管理や健康の維持・増進のためにはどのような取り組みが必要なのかを学習できる。

成績評価方法・基準については、毎週提出する課題（50%）、最終レポート試験（50%）とし、単位の取得には2/3以上の課題提出を必要とした。最終レポート試験の題目は【「健康・ウェルネスとは？その上で自分にできる適した運動とは？」について、論理的・実証的に論ずること】とし、春学期中の制限された生活環境の中で健康に対して自分自身どの様な対応ができるか、そして、実際に春学期に授業内で行った実技の効果を各自振り返ってもらった。

「スポーツスタディ e」を履修した学生の実際的评价が気になるころだが、オンラインという限られた環境下で、学生の健康に対してできる限り有益なスポーツ種目を提供できたと考えている。秋学期はいよいよ対面授業と心待ちにしていたが、残念ながら緊急事態の状況は変わらず、学生・教員双方の安全を第一に考えた結果、全ての授業を「各教員による対面型オンライン授業」とした。春学期のオンデマンド授業の経験を、秋学期の対面型オンライン授業に活かし、学生に対して更に有益な授業にしたいとスポーツ実習担当教員一同考えている。

最後に、「スポーツスタディ e」の考案にあたり、スポーツウェルネス学科では何回も議論を重ね、全カリ事務室からは多大なるアドバイスや協力を頂いた。全カリ部長、副部長、総合チームリーダー、総合チームメンバーの皆様の協力もあり、新設科目として実現できた。そして、実施にあたっては、兼任講師の先生方の快い協力があり、運営においては教育研究コーディネーターの矢野さんの大活躍により、問題なく全12回の授業を終えることができた。この場を借りて関係者の皆様に深く感謝申し上げます。本当に有難うございました。

全カリ副部長および全カリ総合チームリーダーからのご挨拶

2020年4月に全カリ副部長と総合チームリーダーが新たに着任されました。全カリ部長、言語チームリーダーとともに、全カリという大きな運営体を支えています。

全カリ副部長に就任して

飯島 寛之（全学共通カリキュラム運営センター副部長／経済学部准教授）

4月より全カリ副部長を務めております飯島です。立教大学に着任して以降、私から学部の新入生に対して全カリの履修について説明することはありましたが、実のところ全カリには、授業担当者としても、関係の委員としてもこれまでまったく関わる機会はありませんでした。ところが、今年度は授業担当者として、また副部長としても全カリと深くかかわることになりました。

本学の伝統であるリベラルアーツ教育をつくり、変革してこられた先生方の熱意、学際的で幅広い視野をもった授業担当者の教育上のさまざまな努力と工夫、さらに少ない人数で制度の大枠から3,000をはるかに超える授業を細かく支えている事務室スタッフの支援・提案的的確さなど、全カリ組織の一員となって改めて認識させられること、知ることの多い日々です。

他方で、そうした期待とは裏腹に、全カリは卒業のために履修しなければならないものであり、将来の進路選択にとって重要なのは専門科目という学生が多いのが現実かもしれません。教員もまたしかりです。私の専門は国際金融ですが、学部においては、その金融活動から見える経済のメカニズムや経済の変容を理解すること、すなわち専門科目の重要性を説いています。しかし、社会で大局を見据えることができるようになるには、専門と教養の両方が必要なのだと思います。私がかかわる企業の経営者やその予備軍の方々のうち、将来を見据えてものを語れる方々の多くは、もれなく多彩な教養を身に付けています。ヒヤリングや会議では経済・経営を語りながら、宴席では文学、美術・音楽から時には宇宙の話まで自然と口をついてでることも多く、彼らは「それらと経営は結び付いている」といいます。

つつい目先の講義や業務に追われてしまいますが、多様な専門を学ぶ学生が、専門科目との往復のなかで自ら感じ、考え、行動できるような授業運営と制度設計に貢献していきたいと思っています。

総合チームリーダーの仕事

山下 王世（全学共通カリキュラム運営センター総合チームリーダー／文学部教授）

全カリ運営センターが「外国語による総合系科目」の増設を全学部や外国語教育研究センターにお力添えいただきながら行うことになると、前任者からの引継ぎ時に教わった。それが全カリ総合チームリーダーとしての最初の仕事になるということだった。増設しようとしているのにじつは外国語による科目の履修者数は低迷していると聞き、不自由な外国語で専門科目を学んだ経験が自分にもあったことを思い出した。

遠い昔の私事で恐縮だが、私はイスタンブールにある大学で建築学を学んだ。1年目には現地の言語を大学予科で学び、2年目に大学の1年次に入学したのだが、一部の授業内容がよく理解できずだんだん教室から足が遠のいた。そこで受験勉強をもう半年することにして、別の大学に入りなおした。幸いその頃になるとレジュメや教科書がなくても、未知の情報を自分の耳で聞きとり理解することと、ノートに書くということがほぼ同時に出来るようになっていた。とはいえ日本を離れて3度目の秋を迎えていた。

近頃では語学習得だけに現地で丸々2年を費やすような非効率なことをする人はいないと思う。とくに英語はますます身近になり、国内にいながら使う機会も増えてきた。MOOCsにアクセスすれば海外の大学の授業を聴講することもできる。全カリで「外国語による総合系科目」を増設することもそのような時代背景を考えれば当然のことなのかもしれない。とはいえ英語が身近になったといっても、それを身に付けるには相変わらず時間と努力が必要であるし、不自由な外国語による授業の履修を支えてくれるのは昔も今も、興味関心に応じてくれる授業内容やそれを自分も理解したいという想いなのではないだろうか。大変だったけれど履修してよかったと言ってもらえるような「外国語による総合系科目」を増やしていきたい。

新・全カリメンバーからのご挨拶

言語教育研究室主任(言語チームメンバー)

2020年4月に開設した外国語教育研究センターより6名の先生方が、言語教育研究室主任(言語チームメンバー)に着任されました。これにより現在の言語教育研究室は、外国語教育研究センター教員と異文化コミュニケーション学部教員で構成されています。言語教育研究室主任は各研究室を管理運営するとともに、言語系科目構想・運営チームメンバーとして、言語系科目のカリキュラム編成、科目担当者人事、予算執行など多岐に渡る領域で、立教大学の言語教育を牽引していきます。



●芝垣 亮介(英語教育研究室主任)

立教大学が掲げる「新しいグローバルリーダーの育成」において、伝える言葉を上達させることは重要な課題の一つと認識しています。約1,800コマの科目を理念に則ってコーディネートすることで、グローバルリーダーの育成に貢献したいと考えております。



●松本 句子(スペイン語教育研究室主任)

キリスト教の学校で教鞭をとりたくと願ってきましたので、大変嬉しく思っております。専門は日本語母語話者に対するスペイン語教育です。教育現場で見られた事象を研究し、その結果を実際の授業へ活かすことを目指しています。どうぞよろしく願いいたします。



●坂本 真一(ドイツ語教育研究室主任)

専門はドイツ語学とドイツ語教育の二足の草鞋で、主に会話や談話を対象に、音声の研究をしています。最近では学術場で用いられるドイツ語に関する研究に取り組んでいます。これまでの実務経験や教育現場で得た経験を、立教大学の外国語教育の発展に活かしたいと思っております。



●森平 崇文(中国語教育研究室主任)

専門は20世紀の中国演劇と上海の文化です。外国語の学習は外国語でコミュニケーションでき、自分の意見を発信できることが到達目標と考えます。新設された組織にて、新しいカリキュラムと教材を開発し、立教の外国語教育の充実に尽力する所存です。



●関 未玲(フランス語教育研究室主任)

新歓ブースで埋め尽くされた時計台下を通り抜けてから30年近い時が経ち、ご縁があって立教に戻ってくることとなりました。全カリ授業で接する新入生に、画面越しではありますがエールを送りながら、「学び」の変革に努めて参りたいと思っております。



●佐々木 正徳(朝鮮語教育研究室主任)

韓流以後、朝鮮語の学習環境は大きく改善され、学習者層も様変わりしました。容易に文化コンテンツに触れられることに隔世の感と羨望を抱きつつ、SNSを通して自然に異文化との交流を行う学生たちが、学びの意義を実感できるカリキュラムを構築していきたいと考えています。

総合チームメンバー

総合系科目構想・運営チームメンバーを構成する5名のうち以下の3名の先生方が、2020年4月より新たに着任されました。

●市川 誠(総合チームメンバー/文学部教授)

私は着任初年度から全カリ科目を担当させていただきました。専門の「比較教育学」は教育学の一領域ですが、社会学や政治学、人類学、地域研究など近接諸学問の成果に多くを負っており、この点で、多様な学生が学ぶ全カリになじみやすいと思っています。こうした立場からも、全カリのお役にたてたらと願っています。

●宮部 寛志(総合チームメンバー/理学部教授)

私は民間企業で実務を経験した後大学に転職し、数箇所の大学を経て9年前本学に赴任しました。その際、他大学の一般教養教育と比較して、全カリの授業テーマの多様性とその運営体制が印象的でした。本学の教育体系において重要な位置を占める全カリに関する知見を深め、教育理念の一端を勉強したいと思います。

●井手口 彰典(総合チームメンバー/社会学部教授)

私は音楽を通じて社会を考える「音楽社会学」を専門としています。昨今では娯楽の対象とされることも多い音楽ですが、もとはリベラルアーツの自由七科を構成する重要な一角でした。全ての思考の土台となる基礎教養の重要性を再認識しつつ、鋭意業務に努める所存です。

2020年度 全学共通カリキュラム運営センター 名簿

2020年9月現在

全カリ委員会				言語教育研究室				総合系科目構想・運営チーム											
役職名	氏名	所属		研究室名	氏名	所属		役職名	氏名	所属		担当							
部長	井川 充雄	社	メ社	英語	主任	芝垣 亮介	外C	リーダー	山下 王世	文	史								
副部長	飯島 寛之	済	会				山本 有香	外C	メンバー	市川 誠	文	教	人文学						
チームリーダー	細井 尚子	異	異				新多了	外C		宮部 寛志	理	化	自然科学						
	山下 王世	文	史				三浦 愛香	外C		關 智一	済	会	社会科学						
リーダー補佐	山本 有香	外C					三島 雅一	外C		井手口 彰典	社	メ社	社会科学						
	松本 句子	外C					シュロスブリー美樹	外C		石渡 貴之	福	ス	スポーツ人間科学						
運営センター委員	西原 廉太	文	キリ		文学部長		サンブソンリチャードJ.	外C	全カリサポーター										
	内野 一樹	済	会		経済学部長		マッキロイ タラ	外C											
	枝元 一之	理	化		理学部長		師岡 淳也	異						異					
	水上 徹男	社	現文		社会学部長		カズンズステイブン D.	異						異					
	小川 有美	法	政	法学部長		森 聡美	異	異											
	小野 良平	観	観	観光学部長	ドイツ語	主任	坂本 真一	外C						学部選出	和田 悠	文	教	人文学	
	沼澤 秀雄	福	ス	コミュニティ福祉学部長				新野 守広							異	異	佐々木 隆治	済	済
	山口 和範	営	営	経営学部長			濱崎 桂子	異							異	森本 正和	理	化	自然科学
	塚本 伸一	現	心	現代心理学部長	フランス語	主任	関 未玲	外C							石井 香世子	社	現文	社会科学	
	濱崎 桂子	異	異	異文化コミュニケーション学部長											石川 文也	異	異	竹中 千春	法
新多了	外C		外国語教育研究センター長			中川 理	異	異	大橋 健一	観	交	社会科学							
東條 吉純	法	国ビ	教務部長	スペイン語	主任	松本 句子	外C	空閑 厚樹	福	コ政	社会科学								
								飯島 みどり	異	異	西原 文乃	営	国営		社会科学				
言語系科目構想・運営チーム																			
役職名	氏名	所属		担当															
リーダー	細井 尚子	異	異		中国語	主任	森平 崇文	外C	総長任命	石坂 浩一	異	異	社会科学						
リーダー補佐	山本 有香	外C		春学期						細井 尚子*1	異	異	安松 幹展	福	ス	スポーツ人間科学			
	松本 句子	外C		秋学期						佐藤 邦彦	異	異							
メンバー	芝垣 亮介	外C		英語	朝鮮語	主任	佐々木 正徳	外C											
	坂本 真一	外C		ドイツ語						石坂 浩一	異	異							
	関 未玲	外C		フランス語			イヒャンジン	異		異									
	松本 句子	外C		スペイン語	諸言語	主任	細井 尚子*1	異		異									
	森平 崇文	外C		中国語															
	佐々木 正徳	外C		朝鮮語															
	細井 尚子	異	異	諸言語															
	新野 守広	異	異	ドイツ語															
	石川 文也	異	異	フランス語															
	飯島 みどり	異	異	スペイン語(春学期)															
佐藤 邦彦	異	異	スペイン語(秋学期)																
細井 尚子	異	異	中国語																
石坂 浩一	異	異	朝鮮語																

*1 言語チームリーダーとの兼務

*2 サポートグループ
 人文学系サポートグループ
 社会科学系サポートグループ
 自然科学系サポートグループ
 スポーツ人間科学系サポートグループ

全カリニュースレター No.48
 発行 2020.9.14
 発行人 井川 充雄
 編集人 山本 有香、細井 尚子、石渡 貴之
 発行所 立教大学 全学共通カリキュラム運営センター